

羽束師志水町遺跡・長岡京跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告

二〇〇九―一〇

羽束師志水町遺跡・長岡京跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

羽束師志水町遺跡・長岡京跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、道路建設工事に伴う羽束師志水町遺跡・長岡京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

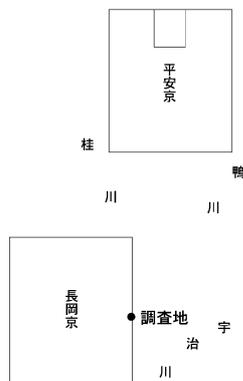
平成 22 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 羽束師志水町遺跡・長岡京跡
長岡京左京第 534 次調査 (7AN-XUK-3) |
| 2 調査所在地 | 京都市伏見区羽束師志水町地内 |
| 3 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 門川大作 |
| 4 調査期間 | 2009 年 12 月 14 日～2010 年 1 月 15 日 |
| 5 調査面積 | 147 m ² |
| 6 調査担当者 | 長戸満男 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図 (縮尺 1 : 2,500) 「久我」・「羽束師」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系 VI (ただし、単位 (m) を省略した) |
| 9 使用標高 | T.P. : 東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 挿図の順に通し番号を付し、写真の番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 長戸満男
付章：竜子正彦 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。 |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	4
(1) 基本層序	4
(2) 遺 構	5
4. 遺 物	9
(1) 遺物の概要	9
(2) 土器類	9
(3) 木製品	10
5. ま と め	11
付章 自然遺物の分析	13

図 版 目 次

図版1 遺構	1 第1面全景（北から）
	2 水田1検出状況（南東から）
図版2 遺構	1 溝2土留め杭列検出状況（南東から）
	2 断割り状況（北東から）
図版3 遺物	1 出土土器
	2 木製品
	3 木製部材

挿 図 目 次

図1	調査区配置図（1：600）	1
図2	調査位置図（1：2,500）	2
図3	調査前全景（南西から）	4
図4	作業風景	4
図5	北壁断面図（1：100）	5
図6	調査区平面図（1：100）	6
図7	西壁断面図（1：100）	7
図8	溝2土留め杭列実測図（1：40）	8
図9	出土土器実測図（1：4）	9
図10	木製品実測図（1：4）	10
図11	木製部材(10)実測図（1：10）	10
図12	自然遺物	14

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	3
表2	遺構概要表	4
表3	溝2土留め杭列樹種一覧表	8
表4	遺物概要表	9
表5	自然遺物一覧表	13

羽束師志水町遺跡・長岡京跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

本調査は、羽束師橋関連道路（第一工区）埋蔵文化財発掘調査である。調査地点は、京都市伏見区羽束師志水町地内に位置する。調査地は古代末期から中世まで継続する集落跡の羽束師志水町遺跡にあたり、また、長岡京左京五条四坊十五町の東四坊大路の推定地でもある。そのため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導のもとに、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて調査を担当した。

(2) 調査の経過

今回の調査は2000・2007年度（平成12・19年度）に引き続き羽束師橋関連道路事業の3次調査である。発掘調査は2009年12月14日から2010年1月15日まで実施した。調査区は当初、南北19.4m、東西7.8m、面積151㎡の規模を予定したが、調査区東側の現況植栽の根株が障害となって若干縮小せざるを得ず結果的には面積147㎡となった。

調査中には、文化財保護課の現地指導・検査を、2009年12月25日、2010年1月7日の計2回受けた。また、契約時の特記仕様書に基づき、鈴木久男氏（京都産業大学教授）、高正龍氏（立命館大学教授）を指導委員とする調査検証委員会を設置し、高教授に2010年1月7日、鈴木教授に2010年1月13日の計2回現地で指導を受けた。

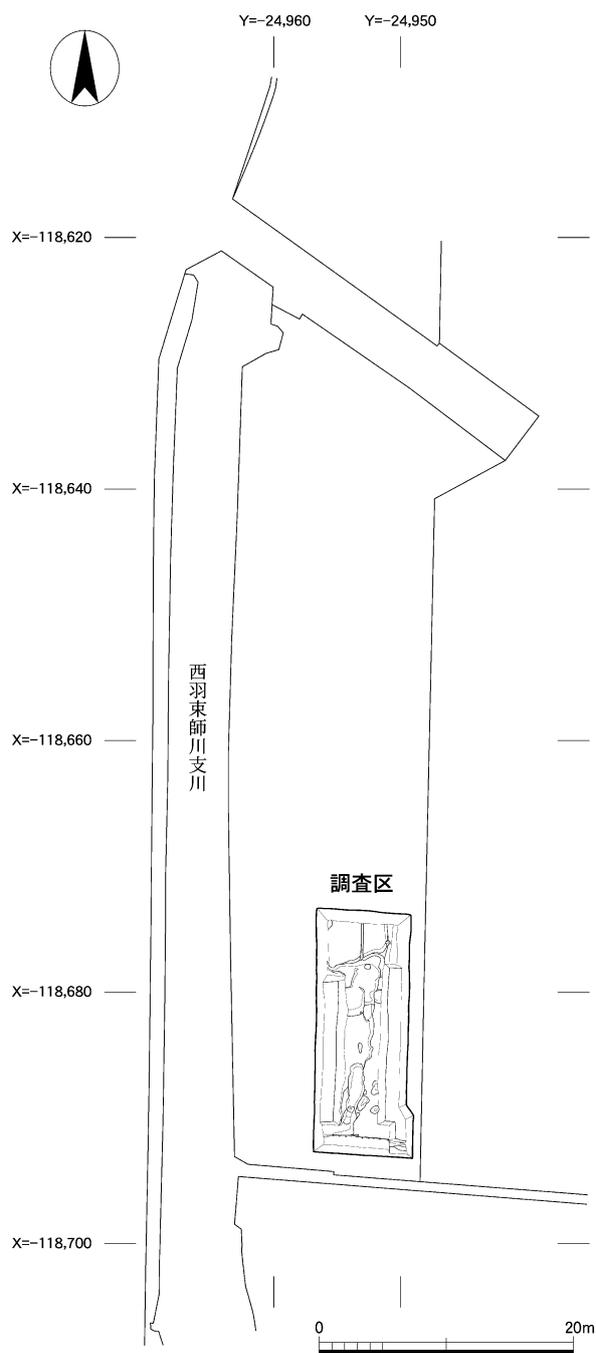


図1 調査区配置図 (1:600)

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は現在の羽束師志水町の集落北西部に立地しており、調査地の北側 110 m には府道 79 号・伏見柳谷高槻線（外環状線）が通り、西側では南流する西羽束師川支川、南側では西流して西羽束師川支川に流入する用水路が隣接する。地理的環境としては、桂川右岸の後背湿地に立地し、周辺一帯では水田が営まれている。

本遺跡周辺の歴史的環境に関しては、『続日本紀』に記載された市内最古の神社の一つである羽束師座高御産日神社境内（史跡）が西方約 300 m に位置しており、その北側に古墳時代後期の集落跡である羽束師遺跡、本遺跡西側には奈良時代の集落跡である長黒遺跡がみられる。

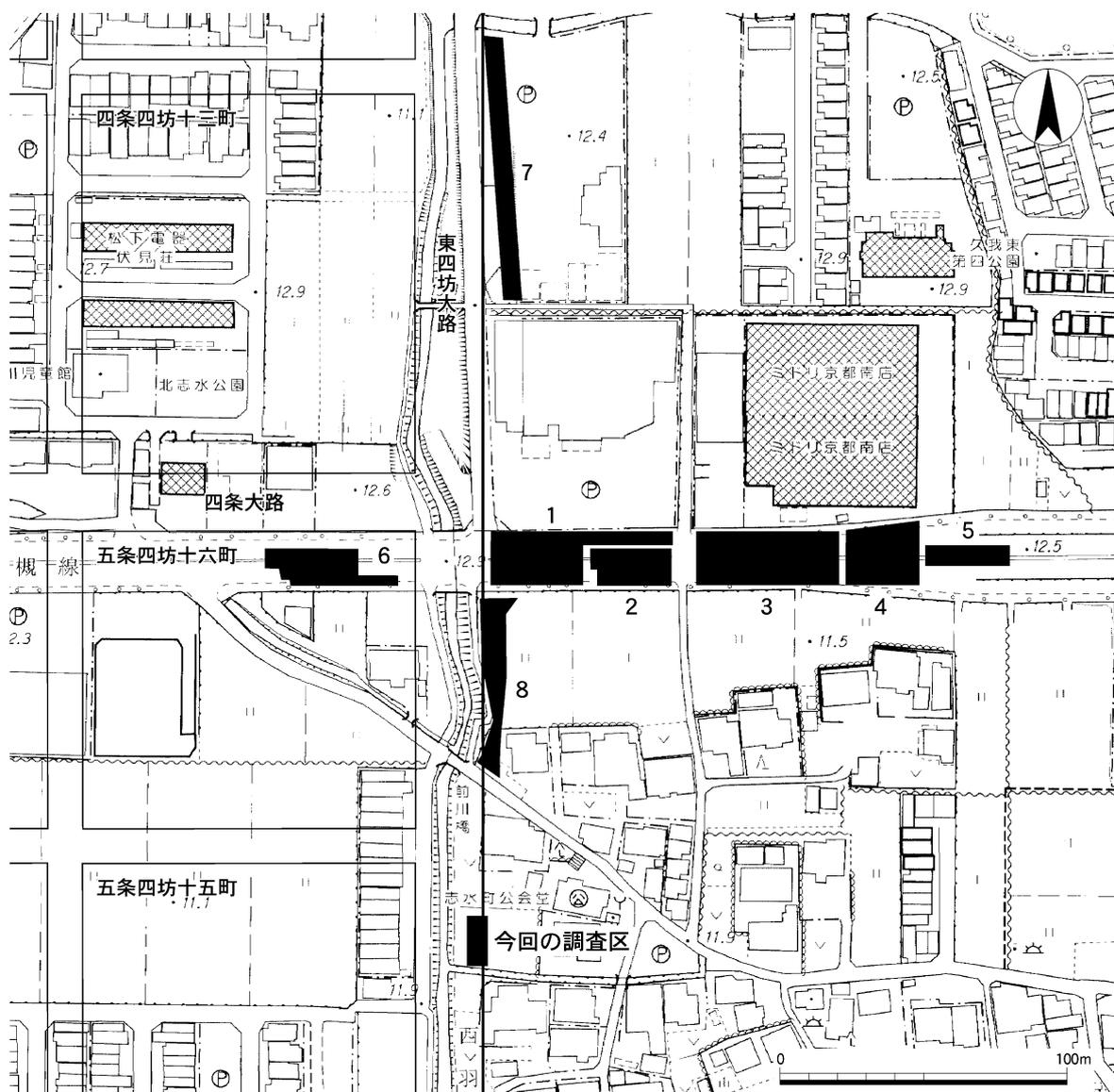


図2 調査位置図 (1 : 2,500)

(2) 周辺の調査 (図2、表1)

調査地点の周辺では1987～1989年度(昭和62～平成元年度)に外環状線道路工事に伴う発掘調査が実施され、長岡京跡では奈良時代から長岡京期の柱穴・流路・溝、室町時代の流路・溝を検出しており、羽束師志水町遺跡では平安時代後期の柱穴、平安時代後期から鎌倉時代の建物跡・井戸・池・柱穴・溝・土坑、室町時代の火葬墓・土壙墓・濠・溝・柱穴・土坑など、各時代の各種遺構を多数検出している。以下、周辺調査の概要を図2と表1に示し、その概略を記す。

調査1では、調査区の西側3分の2は近世以降の湿地状堆積が拡がり、遺構はその東側で検出される。検出遺構は平安時代後期の柱穴、室町時代の溝・東西方向の濠・土壙墓7基(内5基は火葬墓)、江戸時代前期の柱穴内に礎石を据えた建物跡・土坑・溝、江戸時代中期の南北方向の畦畔・溝である。土師器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土している。

調査2では、平安時代後期から鎌倉時代の柱穴・溝・土坑、室町時代の条里地割に沿った溝・火葬墓・柱穴、桃山時代の建物跡・井戸・土器溜りの土坑を検出した。

調査3では、平安時代後期の柱穴、室町時代中期の建物跡・墓跡(土壙墓・火葬墓)・井戸・土坑・濠、桃山時代から江戸時代前期の建物跡・土壙墓・土坑・溝、江戸時代中期の土壙墓・溝・畦畔などが検出されている。桃山時代の墓跡は一辺4mの低い方形の壇上に8基の蔵骨器と甕が埋納されていた。

調査4では、平安時代後期から鎌倉時代の建物跡・井戸・池・溝、室町時代の柱穴・土坑を検出した。桃山時代に以東は湿地となる。

表1 周辺調査一覧表

No.	調査方法	調査面積(m ²)	調査年度	主な遺構	文献
1	発掘	988	1987	平安時代後期の柱穴、室町時代中期の溝・濠・土壙墓・火葬墓、桃山時代～江戸時代前期の建物・土坑・溝、江戸時代中期の溝・畦畔	『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
2	発掘	392	1988	平安時代後期～鎌倉時代の柱穴・溝・土坑、室町時代の溝・火葬墓・柱穴、桃山時代の建物・井戸・土坑	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
3	発掘	734	1989	平安時代後期の柱穴、室町時代中期の溝・濠・土壙墓・火葬墓、桃山時代～江戸時代前期の建物・土壙墓・土坑・溝、江戸時代中期の土壙墓・溝・畦畔	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
4	発掘	560	1988	平安時代後期～鎌倉時代の建物・井戸・池・溝、室町時代の柱穴・土坑、桃山時代の湿地	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
5	発掘	89	1989	平安時代末期～鎌倉時代の建物・井戸・池・溝、室町時代の湿地	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
6	発掘	274	1988	奈良時代から長岡京期の柱穴・流路・溝、室町時代の流路・溝	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
7	試掘	87	2000	時期不明の湿地	『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
8	発掘	330	2007	江戸時代から明治時代の溝・土坑	『京都市埋蔵文化財研究所調査報告 2007-13』

※ 調査Noは図2の番号と対応する



図3 調査前全景（南西から）



図4 作業風景

調査5では、平安時代末期から鎌倉時代の建物跡・井戸・池・溝を検出し、室町時代には湿地状堆積となる。

調査6は、長岡京域内に位置しており、奈良時代から長岡京期の柱穴群・溝、室町時代の流路を検出している。

調査7は、羽束師橋関連道路建設工事に伴う試掘調査で、トレンチを4箇所設定して調査を実施した。その結果、時期不明の湿地状堆積土層を検出している。

調査8は、今回の調査と同様、一昨年に実施した羽束師橋関連道路建設工事に伴う発掘調査で、江戸時代から明治時代の溝・土坑を検出している。

3. 遺 構

(1) 基本層序

現地表の標高は約11.5mを測る。北端部では現地表下0.75m（標高10.75m）以下に層厚0.15mで暗青灰色シルトの現代の水田耕作土（第1層）が認められる。その下層、現地表下0.9m（標高10.6m）以下に層厚0.20mで暗オリーブ灰色シルトの近世以降の水田耕作土（水田1）が堆積する。以下、現地表下1.5～1.8m（標高9.7～10.0m）に層厚0.1m前後でオリーブ黒色粘質シルト、層厚0.2m前後で褐色粘質シルトや灰色粘質シルトの堆積が認められる。板材片などが出土するが、その他に明瞭な時期を示す遺物が未確認であり、土質の状態などから近世もしくはそれ以前の可能性をもつ水田耕作土と考えられる。

現地表下1.7～1.8m（標高9.7m前後）以下では、粘土層を主体とする湿地状の自然堆積とな

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代 ～明治時代	水田1、溝2、落込3	

り、現地表下約 3.0 m（標高約 8.5 m）まで部分的に断ち割って掘削したが、平安時代あるいは長岡京期にまで遡る遺構・遺物は確認できなかった。

(2) 遺 構 (図 5～8、図版 1・2)

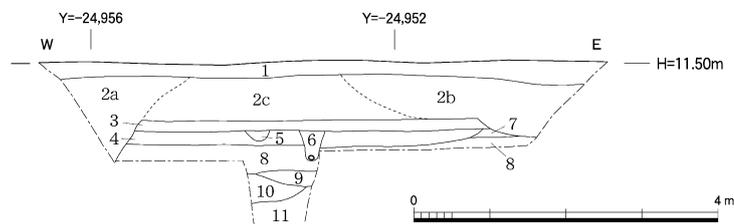
調査では近現代層を機械掘削で除去したが、その段階で調査区内の大半が現地表下 1.2～1.3 mまで宅地造成に伴う攪乱を受けていることが確認され、東西壁両側に約 1.0 m幅で控えの小段を設けた。ただし、南壁際と調査区の約 4分の 1に相当する北端部では近世以降の堆積層が残存していた。遺構は、溝 1 条（溝 2）、水田跡（水田 1）、落込などを検出した。

水田 1（図版 1-2） 調査区北端部では、現地表下 0.9～1.1 m（標高 10.4～10.6 m）に水田耕作土とみられる暗オリーブ灰色シルト（第 2 層）が堆積しており、その範囲の東端から南東隅部にかけて床土の黄褐色シルトが高低差 0.2 m程の畦畔状の高まりを呈する状態を検出した。水田の検出規模は東西 4.8 m、南北 2.2～3.7 mである。出土遺物は少量で、江戸時代後期（19世紀代）以降の国産施釉陶器の小片がある。畦畔状の部分では出土遺物は確認できなかった。江戸時代後期から明治時代にかけての遺構とみられる。

溝 2（図 8、図版 2-1、表 3） 調査区南壁沿いでは、東西方向の横板を伴う土留め杭列を検出した。遺構は杭列北側に横板を組み合わせた状態であり、一部では上下 2 段の横板が認められた。北側の土崩れを防止する構造であり、調査区外南側に接する現用水路の前段階の北側護岸施設と考えられた。南側対岸の杭列は未検出で、調査区外に位置するとみられ、検出した土留め杭列以南から南壁までの部分を溝 2 とした。

杭列は径 5～9 cm、長さ 100 cm以上の丸太杭 10 本が 0.4～0.7 mの間隔で並んでおり、延長 5.3 m分を検出した。横板は長さ 153～199 cm、幅 11～19 cm、厚さ 3～5 cmの板材 4 枚と、自然木の丸太材 1 本が用いられていた。

埋土は上下層に大別され、上層が暗オリーブ灰色粘質シルト、下層が灰オリーブ色粘質シルトである。検出規模は長さ 5.3 m、幅 0.6～0.9 m、深さ約 0.5 mである。江戸時代後期から明治時代の遺物が出土しており、信楽焼締陶器（播鉢）、京・信楽系施釉陶器（椀）、国産施釉陶器（鉢）、



- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1 10YR4/4 褐色粘質土（現代耕土） | 6 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘質シルト（竹管暗渠） |
| 2a 2.5Y3/1 黒褐色泥砂 礫混（攪乱土） | 7 2.5Y5/4 黄褐色粘質シルト 鉄分粒多し（畦畔） |
| 2b 5YR4/6 赤褐色泥砂 砂礫混（攪乱土） | 8 5GY4/1 暗オリーブ灰色粘質シルト |
| 2c 2.5Y3/1 黒褐色泥砂（攪乱土） | 9 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘質シルト |
| 3 5BG3/1 暗青灰色粘質シルト（第 1 層） | 10 10Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト |
| 4 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘質シルト（水田 1） | 11 10Y3/2 オリーブ黒色粘土 |
| 5 5Y4/2 灰オリーブ色粘質シルト | |

図 5 北壁断面図（1：100）

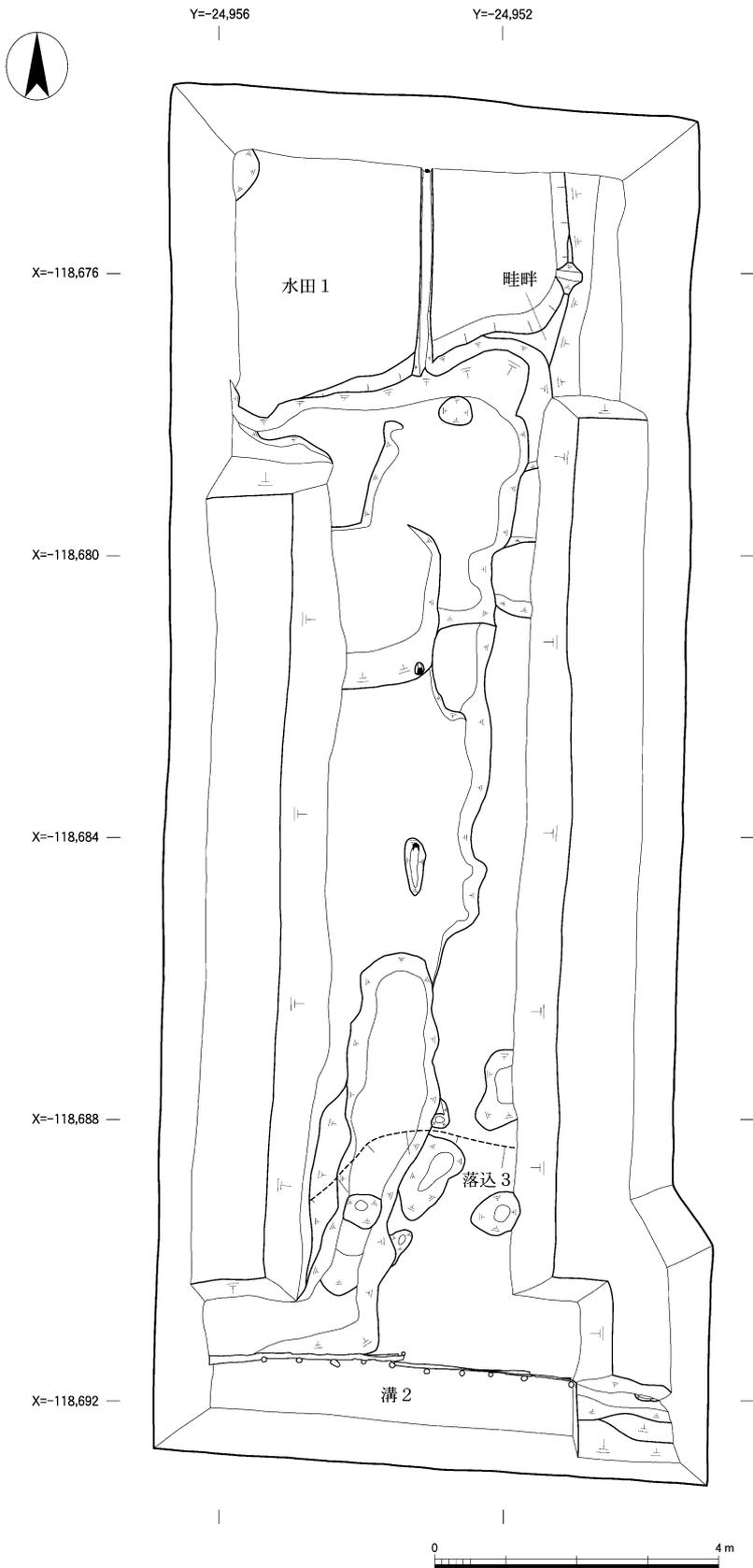


图6 調査区平面図 (1 : 100)

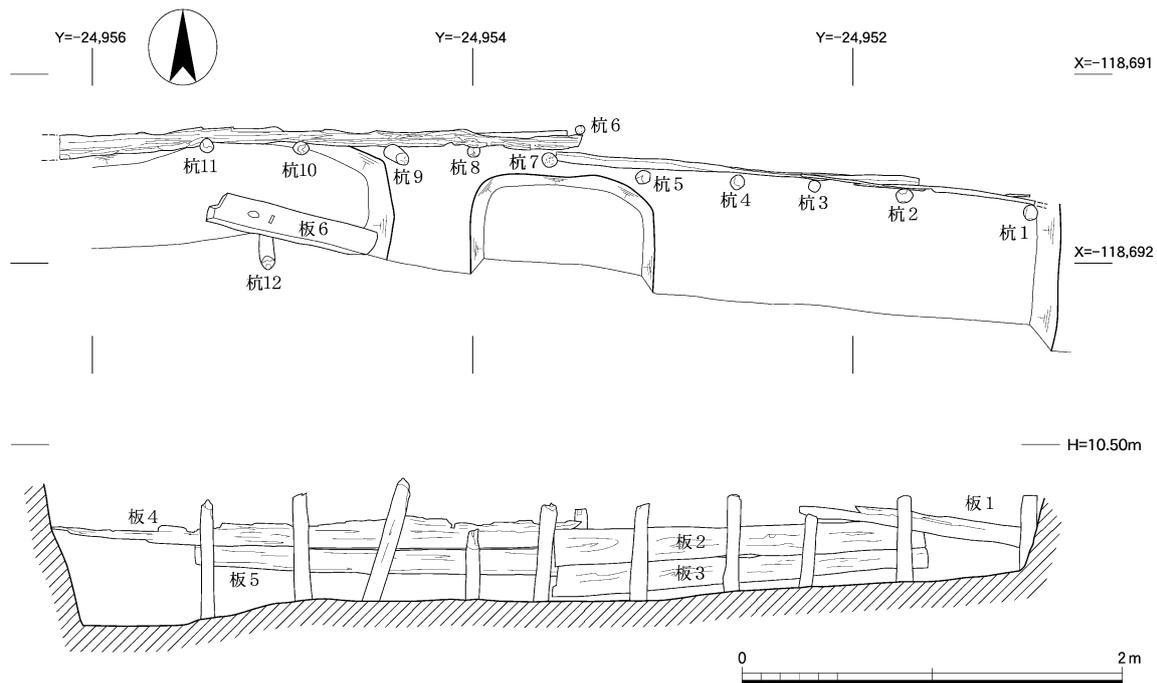


図8 溝2土留め杭列実測図（1：40）

表3 溝2土留め杭列樹種一覧表

種類	杭1	杭2	杭3	杭4	杭5	杭6	杭7	杭8	杭9	杭10	杭11	杭12	板1	板2	板3	板4	板5	板6
樹種	二葉マツ	ヒノキ科	ヒノキ科	スギ	スギ	ヤナギ科	スギ	モミ属										

国産磁器（染付椀）、棧瓦、木製品（曲物底）、加工木材（和船部材・板材・杭）などがある。

落込3 上記の溝2土留め杭列の北側に位置する。遺構の平面形は不明瞭であるが、層的には溝2の下層になる。埋土は暗灰色シルトである。検出規模は東西4.4m、南北2.0～3.2m、深さ0.6m以上である。遺構の性格としては、溝2の下層部であることから、さらに旧時期の水路である可能性がある。江戸時代中期後半代から末期（18世紀後葉～19世紀中葉）に属する遺物が出土しており、土師器（皿・施釉小型皿）、京・信楽系施釉陶器（椀・皿）、肥前磁器（染付椀）、瀬戸美濃磁器（染付小椀）、木製品（下駄・曲物底・把手）、金属製品（銅線）、棧瓦などがある。

その他に、近現代の水田耕作土（第1層）に伴う南北方向の竹製の暗渠を検出した。暗渠は竹の節を削り抜いて設置しており、調査区中央を南北方向に19m延長している。竹管の標高は北側10.25m、南側10.20mで、わずかに南下がり傾斜している。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして3箱である（整理箱に収まらない加工材1点含む）。大半が江戸時代から明治時代の遺物で、土器類・瓦類・木製品・金属製品などが混じる。

鎌倉・室町時代の遺物は、後世の遺構に混入して出土した瓦器（椀・鍋釜類）がある。

江戸時代から明治時代の遺物は、水田・溝・落込から出土しており、土師器（皿・施釉小型皿）、信楽焼締陶器（播鉢）、京・信楽系施釉陶器（椀・皿）、肥前磁器（染付椀）、瀬戸美濃磁器（染付小椀）、木製品（下駄・曲物底・把手）、加工木材（和船部材・板材・杭）、金属製品（銅線）、瓦類（棧瓦）などがある。

(2) 土器類（図9、図版3-1）

落込3出土土器（1～6）1は、土師器の皿S小に分類される。口径7.8cm、残存器高1.4cm、色調はにぶい黄橙色を呈し、内面から口縁部外面までナデによる調整を施す。

2・3は、土師器の皿S大である。共に口縁部の小片であるが、口径10cm前後、残存器高1.3～1.5cmに復元できる。色調は共ににぶい褐色を呈し、内面から口縁部外面までナデによる調整を施す。体部内面と底面の境に凹み圏線を施す器形である。1～3は、土師器の編年基準では 期中相から期中相（18世紀後葉～19世紀中葉）に属する。

4は、施釉した土師器の小型皿である。口径5.6cm、器高1.0cm、一部欠けるが、ほぼ完形である。色調は釉が明褐色、胎土が橙色を呈する。底部外面に制作時の糸切り痕がそのまま残る。底部内面の中央には0.9cm×1.7cm大の長方形の刻印が認められるが、外郭線以外が不明瞭であり、刻印の文字は判読できない。この土器の用途については、口縁部の一部にわずかながら煤が付着してお

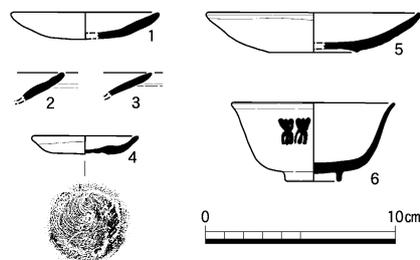


図9 出土土器実測図（1：4）

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
鎌倉時代 ～室町時代	瓦器				
江戸時代 ～明治時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、木製品、金属製品		土師器4点、施釉陶器1点、磁器1点、木製品4点		
合計		4箱	10点（2箱）	2箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

り、灯心の燃焼痕とみられることから灯明皿として用いられたと思われるが、法量から判断すると日常生活用具ではなく、非日常的な祭儀装飾品などであったと考えられる。

5は、京・信楽系施釉陶器の皿である。口径11.3cm、器高2.1cm、色調は釉・胎土共に灰白色を呈する。口縁部外面には煤が0.2～0.5cm幅の帯状になって付着しており、用途は灯明用皿である。

6は、瀬戸美濃系磁器の染付小椀である。口径8.6cm、器高4.2cm、色調は白色の胎土に透明釉を掛けており、口縁端部が褐色を呈する。高台先端部は無釉である。体部外面の直交する4方と底部内面の中央に藍色の呉須を用いて文様を描く。同様の文様については、京大病院構内遺跡AF19区SX1出土遺物（『京都大学校内遺跡調査研究年報 昭和59年度』京都大学埋蔵文化財研究センター 1987年）の中にも報告例がある。

(3) 木製品 (図10・11、図版3)

下駄(7) 小判形の差歯下駄の先端部で、他は欠損している。残存する前緒孔は台のほぼ中央にあり、前差歯の当たり面が残る。断面は逆台形状を呈する。残存長5.5cm、幅7.0cm、厚さ1.0～1.5cmである。小型品であり、子供用の下駄と考えられる。出土状況では下駄の差歯が取り外れた状態を確認しており、同じ所から出土した厚さ0.6～0.7cmの小さな板がこの下駄の歯とみられる。落込3から出土した。材質はカバノキ科。

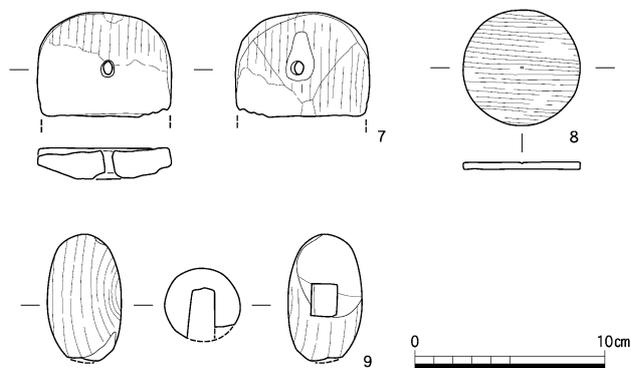


図10 木製品実測図 (1:4)

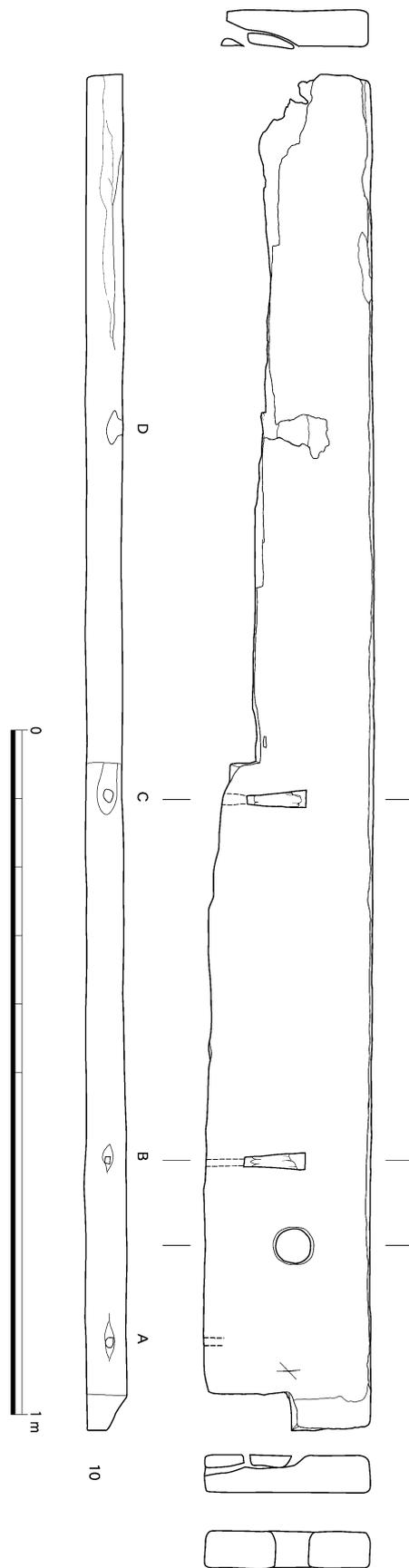


図11 木製部材(10)実測図 (1:10)

板材（8）円形の板材で、径 6.1 cm、厚さ 0.35 cm である。中心に径約 0.1 cm の小さな穴があり、板材の制作時に用いた円形を描くための中心針の痕跡とみられる。用途としては、小型曲物の底の可能性もある。落込 3 から出土した。材質はヒノキ科。

加工木（9）楕円の球状を呈する加工木で、ホゾ穴を施す。最大径 3.9 cm、残存長 6.7 cm である。ホゾ穴は加工木のほぼ中央に施されており、短辺 1.4 cm、長辺 1.7 cm、深さ 2.8 cm である。用途は判然としないが、杖の把手などの可能性がある。落込 3 から出土した。材質はムクノキ。

部材（10）船釘を伴う部材で、長さ 198.0 cm、最大幅 24.2 cm、厚さ 5.0 ～ 6.0 cm である。船釘は和船の部材を側面で接合する際に用いられる技法であり、まず船釘を差し込む溝「ダメ」をノミで切り、釘の通り道をつくってから打ち込む。後は木を埋め込んで完全に隠し、防水処理を施す。ノミで溝を切る際には、後で埋め木が抜けないう、表側より内側が広がるように角度をつける。材質はモミ属。

船釘跡は 4 箇所（A～D）に認められる。A・B の 2 箇所には約 1.0 cm 角の船釘自体が残存し、B・C の 2 箇所には埋め木が残る。「ダメ」は幅 1.5 ～ 2.5 cm、長さ 8.5 ～ 9.0 cm である。D では腐食が進行して船釘・埋め木は消失している。B・C・D 間はほぼ等間隔で 53 ～ 54 cm、A・B 間は 26 cm である。板材の一方の端部には部材を組み合わせる為の欠き込みや削り込みが認められ、板面の中央には径約 5.0 cm の円孔が貫通して穿たれている。また「×」印の記号が 1 箇所に認められる。溝 2 から出土した。

5. ま と め

今回の調査では長岡京跡に関連する遺構や遺物は確認できなかった。羽束師志水町遺跡に関しては江戸時代から明治時代の遺構と遺物に留まり、下層には北側の調査 8（図 2）と同様の湿地状堆積層がさらに広がることを確認した。これは調査区西側に接する羽束師川支川の旧流域の堆積状況と判断できることから、以下では既往の調査成果を踏まえ、旧地形の状況や遺跡の残存状況などをもう少し詳しく述べておきたい。

調査 1（図 2、以下省略）では、調査区の西側約 3 分の 2 が近世以降の深い湿地状堆積で、羽束師川支川の旧流域が広範囲であることを確認する。以東の調査 5 に至る調査区では、平安時代末期から江戸時代中期までの遺構面 4 面を検出する。遺構の基盤層は平安時代に厚く堆積した砂礫層であり、西側が高く東側が徐々に低くなる地形を呈する。

平安時代末期から鎌倉時代の遺構は、この砂礫層上面のほぼ全域に分布し、集落に関連した主要な遺構は東端部の最も低い部分である調査 4・5 に集中する。室町時代の遺構は、調査 3・4 に展開し、東端の調査 5 は湿地となる。桃山時代の遺構は、調査 2・3 を中心に展開し、調査 4 以東が湿地となる。江戸時代には集落に関連する遺構が未検出で、調査 3 が墓域となる。

検出した各種遺構からは、平安時代末期から鎌倉時代にかけて、溝や濠で囲まれた環濠集落であったことがうかがえ、室町時代から江戸時代にかけては一部を除いて墓域となり、集落の中心

が南側に移動した可能性が高い。

このように羽束師志水町遺跡の既往の調査成果では平安時代末期から今日に続く志水村の変遷を知ることができ、室町時代後期の文献史料にみられた「志水」の集落が一部ではあるが既に平安時代後期から始まっていたことが明らかとなっている。

羽束師志水町遺跡の旧地形については、砂礫層が厚く堆積する微高地上に各種の遺構が展開している。遺跡東辺部の湿地は室町時代に調査5、桃山時代には調査4以東、西辺部では羽束師川支川の旧流域に認められる。東辺部では室町時代から桃山時代にかけて湿地土層の埋積範囲が拡大しており、砂礫層を基盤とする微高地が徐々に浸食されていく様子がうかがえ、桂川右岸の後背湿地という立地環境をよく示している。西辺部の羽束師川支川は堆積層が深く調査が及ばないため、開削時期については明らかでない。参考までに述べておくと、隣接地点のボーリング調査結果では表土下約4.3 m（標高約7.3 m）まで湿地状堆積が認められるとの報告がある。

江戸時代の遺構については、調査区外南側に接する現用水路が江戸時代中期に遡る可能性があることが判明した。この現用水路は桂川右岸堤防の裾部を南流する鴨川用水路から導水した水路であり、おそらく周辺地域の農業用水路は江戸時代以降その位置を変更していないものが大半であろうと推測される。

江戸時代から明治時代の遺物について、溝2から出土した和船の部材は、当時の交通手段の主流として使用された川舟の廃材とみられ、当地域の農村生活の一端を示す興味深い資料である。志水村は北に久我村、南に古川村、東に鴨川村、西に菱川村と接するが、周囲の地名に「川」の字が多くみられ、いかにも湿潤な地域であることを示している。

また、自然遺物の分析においても、ミズユキノシタ、イボクサなどの種子が多く出土しており、そうした環境を裏付けている。

付章 自然遺物の分析

土のサンプリングは南断割 37・39 層（図 7）と北断割 45・46 層（図 7）の 4 箇所で行った。

土は 2mm・1mm の篩と 60 メッシュ（1/4mm）のシルクスクリーンで洗浄・選別し、実体顕微鏡で同定した。

南断割の 37 層は、木本では庭木にもなるウコギ科、草本はタデ科・キンポウゲ属・ミズユキノシタ・イボクサなど水湿性のものが多かった。39 層は水湿性のものもあるが、道端・畑などでみられるものの種類が増えている。

北断割では 2 層とも種実は少なく、それぞれ炭化したコメ・コムギが見られた。

表 5 自然遺物一覧表

木本			サンプリング量	約590cm ²	約450cm ²	約640cm ²	約570cm ²	
番号	和名	部位	科名	南断割37層	南断割39層	北断割45層	北断割46層	生育場所
1	アカメガシワ	種子	トウダイグサ			1	1	山野
2	ウコギ科	種子	ウコギ	12	1			山林・庭木
3	トゲ			3	3			
草本								
番号	和名	部位	科名	南断割37層	南断割39層	北断割45層	北断割46層	生育場所
4	ミソソバ	果実	タデ		1			水辺
5	タデ科（三稜形）	果実	タデ	6	4			水辺・湿地・道端
6	タデ科（扁平形）	果実	タデ	15	3			水辺・湿地・道端
7	ザクロソウ	種子	ザクロソウ			1		道端・畑
8	ハコベ属	種子	ナデシコ		3			道端・畑
9	アカザ属	種子	アカザ		1	1		道端・荒地
10	タガラシ	果実	キンポウゲ	2				水田
11	キンポウゲ属	果実	キンポウゲ	13	2			山野・道端
12	アブラナ科	種子	アブラナ		1			水田・水辺・道端
13	カタバミ属	種子	カタバミ		6			道端・畑
14	エノキグサ	種子	トウダイグサ		1			道端・畑
15	スマレ属	種子	スマレ	2	12			道端・山野
16	ミズユキノシタ	種子	アカバナ	75				池・沼の岸
17	チドメグサ属	果実	セリ		1			道端・庭・野原
18	トウバナ属	果実	シソ	1				山野・道端
19	シロネ属	果実	シソ	1				水辺
20	ナス科	種子	ナス	1				山野・道端
21	キク科	果実	キク	3				野原・湿地
22	オモダカ属	果実	オモダカ		1			水田・溝
23	コナギ	種子	ミズアオイ		1		1	水田
24	ミズアオイ	種子	ミズアオイ		1			水田・沼
25	イボクサ	種子	ツユクサ	39	3			水田・沼
26	イネ科	穎	イネ	1	3			道端・野原
27	イネ（炭化）	穎	イネ			1		栽培
28	コムギ（炭化）	果実	イネ				1	栽培
29	カヤツリグサ科（扁平形）	果実	カヤツリグサ		2	1		湿地・山野
30	スゲ属	果実	カヤツリグサ		1			湿地
その他								
番号	和名	部位	科名	南断割37層	南断割39層	北断割45層	北断割46層	生育場所
31	昆虫	頭・上翅・ 胸腹・脚		26	61			

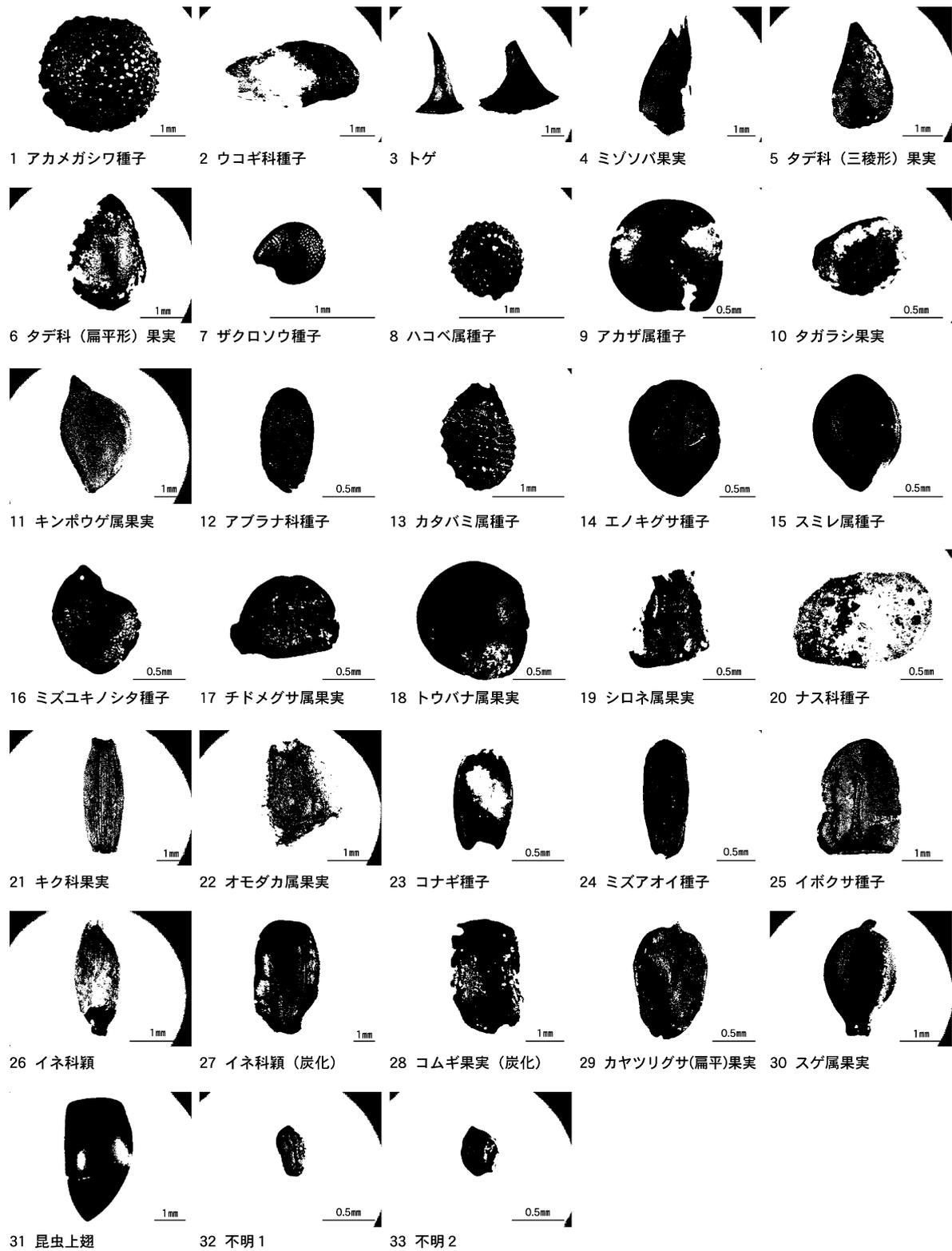


図 12 自然遺物

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	はづかししみずちょういせき・ながおかきょうあと							
書名	羽東師志水町遺跡・長岡京跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-10							
編著者名	長戸満男							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はづかししみずちょう 羽東師志水町 いせき・ 遺跡・ ながおかきょうあと 長岡京跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 はづかししみずちょう 羽東師志水町 ちない 地内	26100	1198 3	34度 55分 48秒	135度 43分 37秒	2009年12月 14日～2010 年1月15日	147m ²	道路建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
羽東師志水町 遺跡	集落跡	鎌倉・ 室町時代		瓦器				
長岡京跡	都城跡	江戸時代	溝、水田跡、杭列	土師器、焼締陶器、 国産陶磁器、木製品、 金属製品、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-10
羽束師志水町遺跡・長岡京跡

発行日 2010年3月15日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961